WS-1 ワークショップ

言語継承・復興活動における教育の重要性

青井隼人（東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所/国立国語研究所）

要旨

言語の継承・復興活動における教育の重要性については多くの先行研究で指摘されている通りである。そこで本ワークショップでは、継承・復興活動の中でも、とくに教育に注目する。本ワークショップの重要な主張は次の2点である。(1) 言語継承・復興における研究者の役割は「促進剤」であり、地元コミュニティの主体的な活動を後押しすることである、(2) 継承・復興活動はそれだけで完結するものではなく、研究活動にも正の影響を及ぼす。

1. 少数言語の継承・復興のための教育とは

少数言語の継承・復興において教育が重要な役割を果たすことを複数の先行研究が指摘している（Crystal 2000; Fishman 1991; Grenoble and Whaley 2006; Thomason 2015 など）。少数言語の教育とは、①少数言語そのものの教育、②少数言語による教育の 2 つを指す。具体的な活動としては、(1) のようなものを挙げることができるだろう。

(1) a. 教室の運営
　b. 教科書の作成
　c. 教科書以外の学習教材の作成
　d. 現地コミュニティの継承・復興活動を支援するツールの作成

(1a) は、少数言語を教えるための教室の運営である。対象には、現地の子供たちだけでなく、継承・復興に携わりたいと考える大人たちも含まれる。子どもを対象にする場合と大人を対象とする場合とでは、教室運営のデザインや教科書、その他の教材、シラバスが自ずと変わってくるだろう。具体的には横山氏の発表で取り上げられる。

(1b) は少数言語を教える/学ぶための教科書の作成である。當山氏は音声を主体とした新しい形の教科書を紹介する。多くの少数言語について、それを教える/学ぶための教科書は存在しない。教科書の作成にあたっては、当該言語の包括的かつ体系的な理解が前提である。言い換えれば、当該言語の参照文法の存在が不可欠である。

また (1c) に掲げたように、教科書以外の学習支援ツールの作成も必要に応じて作成することもあるだろう。我々自身の外国語学習の経験を思い返してみれば、教科書以外の学習支援ツール（単語帳やカルタ、動画など）が学習上大きな効果をもたらしたことに思い当たる人も多いはずである。

さらに (1d) のように、現地コミュニティの話者たちの継承・復興活動を支援するツ

ールの作成も重要である。たとえば、本ワークショップで小川氏が扱うのは表記法の開発の事例である。少数言語の多くは正式な表記法を持たず、琉球諸語もその例に漏れない。小川氏が触れるように、表記法の開発は、話者の「自分の言葉で書きたい」と言う欲求を掘り起こし、実現させるために不可欠なツールである。

本ワークショップでは、すでに少数言語の継承・復興に携わった経験がある方々からの意見交換や情報共有を歓迎する。横山氏の報告で触れられるように、継承・復興活動とは本来個別的なものであり、一般化・抽象化して語ることが難しい。どのような場合にも当てはまる万能な解決策がない以上、個別の経験を互いに共有して集合知として蓄積していき、その中から適切な方策を状況に応じて選び取っていくしかない。継承・復興活動に至るまでの経緯や悩み、困難を克服したときのエピソードなどを積極的に共有していただきたい。

2. 継承・復興活動を思い留まらせる要因

本ワークショップでは、少数言語の継承・復興活動に関心はあるものの、具体的な活動を展開することができていない方々にとっても有益な場となることを目指す。現地コミュニティの要請に応えて当該言語の継承・復興活動に積極的に関わることは、少数言語の研究に携わる者の責務であるという認識が広まってきている。しかし研究者によっては、継承・復興活動に関心がありながらも充分に注力することができていない現状があるように思われる。その要因として、おそらく以下のようなものがあるだろう。

(2) 少数言語の継承・復興活動を思い留まらせる要因

a. 負担が大きそうだという漠然とした不安がある
b. 目標までの道のりがあまりにも遠く感じられ、どこから手をつけたらいいか分からない
c. 業績にしにくいため、つい研究を優先してしまう

本ワークショップでは、(2) のような想いを抱えている研究者に対して、継承・復興活動に積極的に関わるためのきっかけとなる機会を提供したい。話題提供者 3 名をはじめとする言語継承・復興活動の経験者に向けて、未経験者ならではの視点から素朴で率直な質問を投げかけてほしい。本ワークショップが、一人でも多くの方にとって、継承・復興活動への参入を促すきっかけとなれば幸いである。

3. 本ワークショップで議論したいこと

本ワークショップの 3 件の報告で繰り返し議論される論点は (3) の 2 点である。

(3) 本ワークショップで取り上げる重要な論点

a. 研究者の役割は何か？
b. 継承・復興のための活動と研究のための活動とをどのように両立していくか？

(3a) については、とくに横山氏の報告で中心的に取り上げられる。横山氏は**アクション・リサーチ**（AR）という概念を導入し、それが言語継承・復興活動においても有用であることを論じる。その要点は、**言語継承・復興における研究者の役割は「促進剤」であり、地元コミュニティの主体的な活動を後押しすることだ**ということである。

(3b) の論点の背景には、現状では継承・復興活動は研究活動としては認識されにくく、研究とは別の活動（つまりアウトリーチ活動）としておこなわれる場合がほとんどであるという事情がある。私たちは継承・復興活動を研究とは切り離して考えてしまいがちであり、両者の活動にかけるエフォートのバランスをいかにして保つかということをつい考えてしまう。しかし**継承・復興活動はそれだけで完結するものではなく、研究活動にも正の影響を及ぼす**ものである。たとえば、當山氏が報告するように、包括的で体系的な教科書の作成の過程で記述が不充分な項目が浮かび上がってくる場合がある。また、小川氏が述べるように、体系的に整えられた表記法とそれを使って電子的に書くことができるフォントを開発し、その利用を研究者・現地話者に広めていくことによって、調査が今よりももっと効率的におこなえるようになる可能性がある。

その他にも、報告者のそれぞれから、各自の具体的な経験や成果物の紹介、重要な問題提起があるだろう。3名の報告を刺激として、活発な議論が交わされることを願う。

参考文献

Crystal, David (2000) *Language Death*, Cambridge: Cambridge University Press.

Fishman, Joshua A. (1991) *Reversing Language Shift: Theoretical and Empirical Foundations of Assistance to Threatened Languages*, Clevedon: Multilingual Matters.

Grenoble, Lenore A., and Lindsay J. Whaley (2006) *Saving Languages: An Introduction to Language Revitalization*, Cambridge: Cambridge University Press

Thomason, Sarah G. (2015) *Endangered Languages: An Introduction*, Cambridge: Cambridge University Press.